

# インタビュ

ラピュタロボティクス(株)  
執行役員

## 森亮氏



ラピュタロボティクス(株)(東京都江東区)は、世界最先端の制御技術およびAI技術を活用したクラウドロボティクス・プラットフォームを提供するベンチャー企業。また、その技術を活用した倉庫向けのロボットソリューションも提供しており、大手企業を中心に採

用が拡大している。今回、その内容などについて執行役員の森亮氏に話を伺った。

森 倉庫などで使用するヒト協働型ピッキングアシストロボット「ラピュタP A A M R」を展開している。ラピュタP A A M Rは、注文商品エリアに先に移動して待機し、作業員がモニターに表示された商品をラピュタP A

ターとして64億1500万円の資金調達を実施し、累計調達額が約106億円となった。事業体制も強化しており、6月には、東京都江東区木場に約400㎡のデモ施設を併設した新オフィスを開設。デモスペースには20〜25台のピッキングアシストロボットを常備し、効率的に開発できる体制を構築することも、お客様にラピュタP A A M Rの性能を体験・体感していただける機能も強化した。8月には

# 独自のクラウドロボPFを提供

## 倉庫向けでの採用が拡大



——貴社の事業概要から伺います。  
森 当社は、チューリッヒ工科大学発のベンチャー企業として2014年に設立し、最先端の制御技術およびAI技術を活用した次世代クラウドロボティクス・プラットフォーム「raputa」(ラピュタアイオー)を中核技術に据えている。ロボットの開発・運用な

に連携させることができ、分析・解析といった作業をクラウドで行える。複数台のロボットの管理も容易で、遠隔地からでも制御が可能となる。近年は、このラピュタアイオーを当社自身で活用したロボットソリューションの開発・導入・運用支援も行っている。——そのロボットソリューションについて。

——AMRに搭載されたカゴに乗せると、次の商品エリアや集積エリアなどに自律移動するロボットで、現場に簡単に導入でき、生産性向上と労働環境の改善が同時に実現できる。販売面では、本導入と同じレベルでラピュタP A A M Rを90日間

活用できる体験プログラムを4月から開始。また6月には、ラピュタP A A M R導入後の生産性に於いて、月額サブスクリプション費用が変わる成果連動型「費用対効果保証プログラム」を新規のお客様向けに開始した。——採用状況について  
森 現在、日本通運、34台が導入されており、導入前に比べて生産性が約2倍に向上した。こうした現場できちんと成果が出せる点などが評価され、デロイト トーマツ ミック経済研究所の調査では、ピッキングアシストロボットの市場にて、22年度市場シェア見込みでトップの46・2%を達成し、3年連続で販売シェア1位を獲得した。そして、11月にはラピュタP A A M Rを活用して出荷した商品数が累計1000万ピースを突破する見通しだ。——そのほか取り組みについて。  
森 事業面では、4月には、ゴールドマン・サックスをリードインベス

——今後の方向性について。  
森 製品面では、大容量の75Lコンテナサイズに対応可能な「ラピュタP A A M R XL」を開発し、9月から受注を開始した。また、自動フォークリフトの開発も進めており、23年半ばの市場投入を目指している。当社としては、ラピュタアイオーを中核に、こうしたロボットソリューションのラインアップを拡充していきたい。中期的にはラピュタP A A M Rといった自社製品だけでなく、他社製品も含めた物流現場の様々な自動化設備をラピュタアイオーで高度に連携させ、倉庫の入荷から出荷までトータルで制御・管理できるようにし、現場生産性を最大化できるようなソリューションを提供していきたいと思う。(聞き手・副編集長 浮島哲志)